

私も真珠湾攻撃した方と同じく特攻隊の一員です。今では、戦没者に対する悲しみでいっぱいです。我々や戦没者のことを心豊かにし、よく理解して頂きたい。戦争というものは危険地域勤務の者も、そこから逃げることもできないし、艦隊勤務の者も当然、海へ逃亡することができません。

我々軍人として、召集、採用された者は、途中で投げ出されており、このようにされて気持ちのいい方はおられませんでしょう、この償いは誰が、いつしてくれるのでしょうか。

最初の恩欠者は全国で二百万といわれておりますが、毎年一〇%位ずつ減っていると聞きます。一刻も早く救済して下さいよう望みます。

海軍戦記

「ラバウルでの戦火」

愛媛県 渡 辺 福 松

私は大正十五（一九二六）年三月一日生まれました。昭和十六（一九四一）年、大東亜戦争の始まる前ですが、既に支那事変（日中戦争）は長く続き、太平洋の雲行の怪しくなってきた頃です。私は、昭和十六年八月一日から愛媛航空機乗員養成所の職員として勤務中でしたが、軍国日本の若者として一日も早く志願せねばという気概から、昭和十八年三月、同所を退職して、四月に志願兵として佐世保第二海兵団に入団しました。

当時、私の家族は両親と兄・姉がおり、私は次男で、家業は農業でした。

入団以来約二カ年、海軍の厳しい訓練に明け暮

れましたが、昭和十八年八月にはラバウルの第九五八海軍航空隊に入隊が決まり、広島の呉港より当時兵員輸送を行っていた戦艦「長門」に乗艦し、転属員としてラバウルに向かうこととなりました。

海軍航空隊には、決められた呼称があるので、航空母艦を母艦とする母艦飛行機隊、厚木海軍航空隊などの地名を冠称する海軍航空隊があり、さらに数字の一桁、二桁の航空隊、そして第九五八海軍航空隊のように三桁の数字を冠称する海軍航空隊があります。

この三桁数字の海軍航空隊は、その数字で航空隊の種類を示しており、九〇〇番台は海上護衛航空隊です。従って私の入隊した海軍航空隊は海上護衛を任務とする第九五八護衛航空隊だったので

す。
ラバウルへ赴任するため呉港を出まして、まもなく豊後水道付近に差し掛かった時、「長門」の艦長より指示がありました、「今日が内地の見納

めかも知れない。よく見ておけ」と言われまして、全員が甲板にでて母国の山々、そして遙か故郷の四国の山々の風景を充分に眺めることができました。

太平洋に出ますと、そこで我が日本海軍の誇る巨大・新鋭の戦艦「武蔵」「大和」に合流しました。そして一大艦隊となり、一番艦「長門」、二番艦「武蔵」、三番艦「大和」と縦列を作り、その周囲には巡洋艦、駆逐艦、潜水艦が護衛すると言う、艦隊としての威容を示しつつ進行することとなりました。

二日間は平穩無事な航海でしたが、三日目よりは台風直面にすることとなりました。台風圏に入ったので、波の高さ、風の強さは我々の想像以上のものでして、波は三〇メートル以上もあるかと思える大波となつて艦隊を翻弄し、わが戦艦「長門」はもちろん、後続の「武蔵」が頭の上のしかかるように荒波に持ち上げられていま

した。

このような台風の中を突き進み、ようやく台風圏を脱して南下を続けました。台風圏を抜けた太平洋は静かな海となり、それでも敵潜水艦等を警戒するため蛇行をしつつ、ようやくトラック島に入港することができました。

このトラック島で我々は「長門」を降り、こんどは重巡洋艦「高雄」に乗艦してラバウルに向かいました。そして二日後にラバウルに入港しました。

重巡洋艦「高雄」は昭和十八年当時は、ガダルカナル島撤退作戦の支援や、主としてトラック島を中心として南方への人員輸送に活躍していました。

当時の「高雄」の行動表を見ますと、

昭和十八年

二月二十三日 艦長・猪口敏平大佐着任

七月二十一日 トラック島出港

七月二十六日 横須賀入港

七月二十八日 入渠

八月 二日 出渠 修理整備作業

八月 十七日 横須賀出港 人員輸送

八月二十五日 トラック出港 人員輸送

八月二十七日 ラバウル着 同日出港

となっています。

我々は、この八月二十五日にトラック島で「高雄」に乗艦し、二十七日にラバウルへ着いたこととなります。

当時のラバウル港は美しい南の風景をした港で、戦況もまだ酷しくなく、平穏無事でした。港では船が入港しますと土民がカヌーのつて船の廻りに集まり、バナナやパイヤを売りにきていました。そして船の人達はタバコや缶詰と物々交換をして南の果物を満喫しているという状況でした。

ラバウルで「高雄」を下艦し、第九五八海軍航空隊に入隊しました。この航空隊は水上偵察機に

よる海上護衛航空隊でした。入隊後直ちに松島基地へ移動しました。

約二カ月くらいは静かな毎日で、時には夜に米軍のボーイング爆撃機が飛来して二、三発の爆弾を落として行く程度でした。とくにニューブリテン島にあるラバウル港は、当時、その背後にある内南洋の最大の基地であるトラック島防衛の前衛基地であり、同時に米国・濠洲軍の連絡を遮断するための橋頭堡として重要であつたのです。また我が軍の南方作戦の補給基地であり、人員輸送は勿論、水、食料、弾薬の補給地点として海軍が重要視していた南方最大の拠点であつたのです。ですから巡洋艦、駆逐艦が補給などで、三、四隻入港しますと、その状況はレーダーで補足され、必ずと言っていいほどに敵の爆撃機や戦闘機が、何十機となく、ニューギニア東南部の要衝ポートモレスビーからやって来るようになりました。

これを迎え撃つラバウルの海軍航空隊の応戦も物凄いものでした。ラバウル海軍航空隊の基地

は、ラバウル市街に近いラバウル東飛行場と改名した戦闘機用のラクナイ飛行場と、内陸にあるラバウル西飛行場と改名した陸上攻撃機用のブナカナウ飛行場があり、これらから飛び立った邀撃空中戦は凄まじいものでした。

また、ラバウルの周辺には高射砲基地が数十箇所あり、これらも一斉に火蓋を切ります。港の巡洋艦など艦船からも一斉に高角砲・高射機関銃などを発射します。

私たちは護衛海軍航空隊として水上偵察機をもっており、その水上偵察機を、上空からの破片、横からの機銃弾から護るために奮闘します。そして頭上では激しい空中戦が展開されているという、この世の地獄そのものの光景でした。

また港内では、空襲に対応して船艇が出港や防衛のため全速で走り廻り、その高波からも水上偵察機を護る必要があり、これが大変でした。このようなことが何回も行われるために、気が変に

なった人も何人かおりました。

わが海軍の水上偵察機には、古くは「九五式水偵」があり、当時は「零式水偵」が太平洋戦争の全期間、偵察、哨戒、連絡、輸送、救難、防衛などに活躍していました。

ラバウルは、その後も、連日敵機の来襲を受け、銃撃、爆撃の繰り返しでした。このような状態は昭和十八年十一月頃より十九年の十一月頃まで続いたのです。特に昭和十九年の二月の空襲は最も激しく物凄いものでした。

我々の松島基地の前には休火山があり、そこまでの距離は八〇〇メートル程度です。その下に工作艦「八海丸」が碇泊していました。それを目標として敵の雷撃機が数機魚雷攻撃を行い、五、六発の魚雷が命中して「八海丸」は真っ二つに折れて沈没してしまいました。それを目の前で見ていましたが、それは物凄いものでした。

また、私たちの兵舎の横には第八十一警備隊が

いたのですが、その警備隊の砲台には敵の大型の爆撃機が数十発の爆弾を投下し、完全に破壊されました。

これを最後に、我々は松島基地を引き揚げ、本隊の丸木の水上基地に帰りました。そして私は本隊の公用士としてラバウルの街にあった第八艦隊司令部、陸軍の今村大將のいる南東方面軍司令部、第八潜水艦隊司令部、さらにブイン司令官・飯島司令部などへ毎日公用の連絡に行くことになりました。その期間は八カ月程度でしたが、その往復が大変で、空襲や銃爆撃の中を行くので、いく度も死を覚悟した時もありました。

その頃より、敵の上陸に備えて、防衛陣地の構築に入り、一方では陸戦の訓練を行いました。陸戦の訓練では、来襲する戦車に爆弾を抱えて戦車に飛び付き、飛び込むという特攻訓練を毎日行うに行いました。

それも終わると、こんどは食料の確保のために芋作りをすることとなり農場を作りましたが、そこで終戦となり、その後、十一月月間の集団生活をする事となりました。

鏡原地区には昭和二十一年六月まで集団生活をし、労役に狩り出されました。船が入港すればオーストラリア軍の使役として荷揚げ作業に行きます。また英国の掃海艇の掃除作業にも行きましたが、これには大変酷い仕打ちをされたこともあり、これも想い出として残っております。

昭和二十一年六月、アメリカの貨物船「リバティ号」で名古屋港に戻って来ました。

昭和十八年八月、呉港を出港、遙か南のラバウルへ行く時、日本の土は二度と踏めないと思っておりましたが、こうして無事に還えることができ、日本の土を踏んだ時には感激して涙が溢れました。

【解 説】

労苦体験を語った渡辺氏の所属した第九五八海軍航空隊は、護衛航空隊として水上偵察機を保有し、海上護衛に任じていた。

配置されていた水上偵察機（水偵）は零式水偵といわれる。この零式水偵の主要要目は次の通りである。

零式というのが零戦とは関係なく、皇紀二六〇〇年に採用されたことにより零式と冠称した。

単葉三座水偵で愛知零式水上偵察機である。

当初それまで使用されていた九四式水偵（川西）の後継機として川西航空機と愛知航空機が開発を進め、愛知機が採用された。極めて高性能機で「単葉三座水偵の最高傑作機」と言われた。

太平洋戦争の全期間にわたり、偵察、哨戒、輸送、連絡、救難などの任務に従事し、沖繩戦には、爆弾を積んで特攻にも参加している。

終戦までに、一四二三機と水偵では最高の生産機数を記録している。

乗員：三人

全長・全幅：一一・四九×一四・九メートル
発動機：三菱「金星」四三型

空冷一〇八〇馬力一機

最大速度：時速 三七六キロ

航続距離：二〇八九キロ

武 装：爆弾 二五〇キロ

七・七ミリ機銃一挺

二〇ミリ機銃一挺追加（魚雷艇攻撃用）

また、渡辺氏の所属した第九五八海軍航空隊は、昭和十七年十二月一日、ラバウルで開隊され、原隊は指宿航空基地（鹿児島県）、最終所属の航空艦隊は第十一航空艦隊で、終戦までラバウルにあった。